

須磨海浜水族園 亀崎園長の

あっぱれ!

水の動物たち



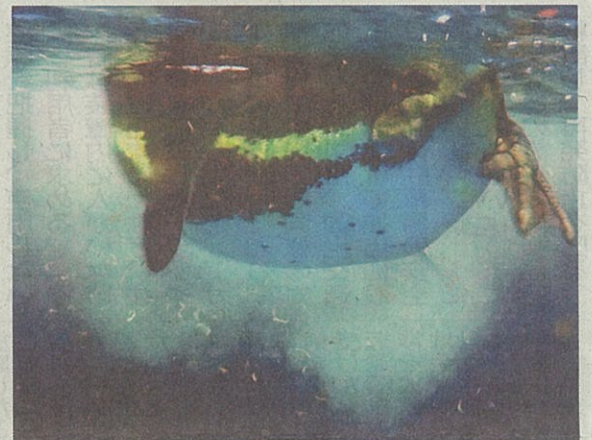
「うんち」を見直そう

魚も。ピチ。ピチ。ピチ。栄養満点

瀬戸内海の将来の在り方を考える環境省の会議があり、出席した。瀬戸内の漁業関係の代表者から発せられた意見は「海がきれいになりすぎて、ノリも魚も取れなくなった」。おかしい話である。水がきれいな方が魚は取れると多くの人が信じている。ところが、きれいになったから魚が取れないという。確かに海に捨てられたごみは見苦しい。また、濁った水も、透き通った水に比べると、汚い感じがする。ここで濁りの正体を考えなければならぬ。

生物の豊かさを示しており、濁っていけば生産性が高い。「水清ければ魚棲まず」は正しい解釈なのである。

植物プランクトンの体は炭素(C)、水素(H)、酸素(O)の他に、窒素(N)やリン(P)を必要とする。C、H、Oは二酸化炭素や水から得ることができ、NとPは水中から吸収するしかない。NとPがあれば植物プランクトンは増殖し水は濁るが、なければ発生せずに水は透き通る。植物プランクトンは動物プランクト



①マゼランペンギンのふん。水溶性のふんをする。情報伝達などの意味があるかもしれない—浜口未帆さん撮影②トゲウオの仲間、ハリヨのふん—大石美希さん撮影

ればならない。濁りの原因が人工的な物質ならば問題だが、植物プランクトンならば、それは海での光合成、つまり

の餌となり、それはさらに魚の餌となる。いわゆる食物連鎖である。つまり、NやPがないと、ノリも魚も取れないのである。NやPはどうやって海に供給されるか。それは、生物の死骸や排泄物、つまり「うんち」から供給されるのである。

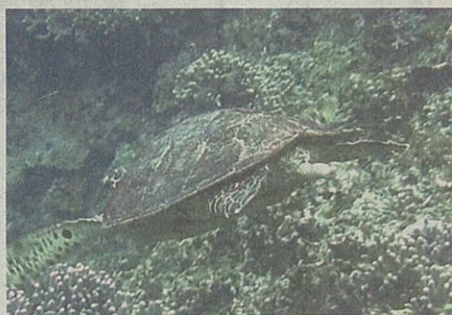
このように重要な役割を持っているにもかかわらず、「うんち」は嫌われ者である。今や我々の「うんち」は便器の中に落ちると、あっという間に水に流され、下水処理場で汚泥となったあとは焼却されてしまうことが多い。確かに、そのおかげで私たちは清潔な生活ができるようになった。しかし、昔は川から海に流れることの多かった「うんち」が、今では海に入らなくなり、海の栄養が少なくなっている。

と、便器の中をのぞき込む時間が長くなる。そして、勢いよく流れ去る我が「うんち」に惜別の思いさえ持つようになる。この「大うんち展」を担当したN女史(窒素ではない)も、このところ元気がよさそうだ。「うんち」は生態系の中を循環するNやPのある時の重要な姿である。その存在の重要性を認識し直す機会となれば幸いである。

次回5月24日



③カワセミの放糞。白いは尿酸を含むから—笹田一郎さん撮影④ウミガメの仲間、タイマイのうんちシーン。園長本人が沖縄で撮影。惜しくも落選となる



もっと「うんち」を見直そう。そんなメッセージを伝えて、須磨水族園では「大うんち展」を開催している(7月1日まで)。いろんな動物の「うんち」や子供が口から入って肛門から出てくるうんちトンネルもある。「うんち」の写真なんか撮る変人おらんわ」という周囲の声もあったが、この特別展を記念して

このように仕事で「うんち」に関わっていると、何となく日々の「うんち」も気になるようになる。用を済ませたあ



亀崎直樹 1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園園長。東京大学大学院農学生命科学研究科客員教授、NPO法人日本ウミガメ協議会会長を兼務。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。